

キガリからローマへ

ローマで開催されるヨーロッパ大会の一ヶ月前、11月14日から18日まで、ルワンダのキガリで、「地上における信頼の巡礼」のひとつが開催されました。それは、南アフリカのヨハネスブルグ（1995年）、ケニアのナイロビ（2008年）に続く、アフリカにおける三つ目の大会でした。大会の参加者は、ルワンダ全土から、また東アフリカの五大湖地域から、さらに遠くからも集まり、35の国々から、8500人以上の若者たちが集まり、4000の家庭を迎えられました。

このキガリの大会の後、わたしと二人のブラザーは、北キヴ州（コンゴ）のゴマ市を訪ねました。最近の動乱によって、何十もの避難家族がこの地域に流入しています。

ルワンダは、大きな苦しみのときを経てきました。記憶はまだ鮮明で、傷口はいまだに開いたままです。しかしこの国は、復興の道を歩み出しています。深い思いやりと癒しを生きる人々、例えば、自分の子どもでもあるかのように孤児の世話をする人々をわたしたちは尊敬します。

わたしたちがルワンダから持ち帰ったもの、それは何よりも、和解への招きです。教会はより深い和解に貢献したいのです。それは、強制的な共存ではなく、心の和解のことです。これは、すべての人への招きです。相容れないと思える人々と、あるいは本来に相容れない人々と、どのように和解してゆくのか。わたしたちは、あきらめることにもただ受身になることにも決定づけられているわけではありません。なぜなら、キリストは、いつまでも敵対すると思われるもの同士を和解させるために来られたからです。

ゴマ市では、異常な状況の下、はかり知れない苦痛や、ときには極度の貧困の中で、平和をつくり出す人々や愛を生きる人々に会いました。その信仰の故に、彼らは、混乱と恐怖と放棄の現実のただ中でもしっかりと立ち続けています。わたしたちは、他の機

関がまったく機能しない中、人々を歓迎する場所としてとどまっている教会の姿を目の当たりにします。

わたしは、アフリカの若いキリスト者たちの活力に感動しました。この躍動する力は、希望のうちに堅く立ち続けるための福音の励ましを示しています。

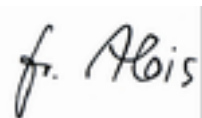
2012年が、アフリカの青年たちに特に心に向けた年だとしたら、2013年は、特にアジアの青年たちに耳を傾ける年にしたいと思います。今年の10月から11月にかけて、わたしと何人かのブラザーたちは、アジアの諸国へ巡礼し、韓国のソウル、インドのヴァサイとムンバイなどを訪問します。

わたしたちは、この2013年を、100人の青年たちとイスタンブールを訪問することから始めます。それは主の公現の祝日を総大主教バルトロマイとイスタンブールのキリスト者たちと祝うためです。

去年ベルリンで公表された「テゼからの手紙：新しい連帯に向かって」は、今後3年間、わたしたちの模索の基調を示し続けられます。そこには、2015年8月にテゼで開催される「新しい連帯のため大会」を準備するためのステップがまとめられています。（www.taize.fr）

この準備を続行させるために、わたしたちは、この2013年を、ローマで開催されるヨーロッパ大会から始まって、どのように「神への信頼の源泉を発見してゆく」かを模索する年にします。教皇ベネディクト十六世が開催を宣言した「信仰年」もこの模索を促進させます。前へ進むことの助けとして、ここに四つの提言をします。

（ブラザー・アロイス：テゼ共同体院長）



テゼからの提言 2013年

神への信頼の源泉を発見してゆく

提言：その一

信仰の旅路について話し合う

人生の意味とは何か？ 苦しみや死についてはどのように考えたらいいのか？ どこに、いのちあふれる喜びを見出すことができるのか？

これらの問いに、すべての世代、すべての人は向き合うのです。

そして、答えは出来合いの常套句に見つけることはできないのです。

「神は存在するのか・・・」 神についての問いは地平線から姿を消していませんが、その問われ方は劇的に変化しました。

個性がわたしたちの時代の中心的であるという事実は、肯定的な側面を持っています。それは人間の価値、そして人間の自由と自律性の価値を強調するということです。

宗教が大きな存在感をもっている社会においてでさえ、神への信頼は、ますます自明性を失っています。神への信頼、それは個人的な決断を必要とします。

「神は近寄りたがいの光の中に住まわれる方、だれ一人見たことがなく、見ることのできない方」（1テモテ6:16）。使徒パウロのこの言葉は、現代のわたしたちにもあてはまるものです。この言葉から、わたしたちはどのような道に招かれているのでしょうか。

ともに探し求めるのです。これらの問いについて、他の信者、究極の真理など人間には不可知なのだと考える人、無神論者など対話しながら。信仰と疑いの境界線は、信者でない人だけでなく、多くの信者の中でも揺れ動いているのです。

神を探し求める人々が、その信仰を肯定的に表現することが少ないからといって、彼らの信仰が弱いというわけではありません。それは、彼らが神の超越性をとても意識しているからです。彼らは概念の中に神を閉じ込めたくないのです。

もしだれも神を見ることができないなら、どのようにして初期のキリスト者たちは「イエスの中に神を見る」と言えたのでしょうか。使徒パウロは「御子は、見えない神の姿」と記しています。(コロサイ1:15)

イエスは神とひとつ。イエスは、まことの神であり、まことの人間です。この二つは別々のものでもなければ混合されたものでもありません。神の神秘のパラドックス的なこの表現を説明するために、どれだけ多くの議論が歴史の中で繰り広げられたことでしょうか！ わたしたちの模索は、このような議論の中に置かれません。これらは模索の道における標識のようなものです。

イエスは、その存在とその行いのすべてによって、神が愛であることを示しておられます。イエスは、神の心を明らかにします。神は、一方的な権力ではなく、わたしたちを愛しているお方なのです。

初期のキリスト者たちは、イエスが死から復活されたこと、そのイエスが神であることを証言しました。イエスは、ご自分に出会う人々の心の中に、宝として、神のいのちを宿させます。そして、その宝そのものは、一人のお方としての存在であり、「聖霊」という名をもち、わたしたちを慰め励ますお方です。

「父」「子」「聖霊」という名前が示すのは、神が、関係、対話、愛であるということ、そしてこの「父」「子」「聖霊」が一つであるということ。このように、キリスト者の信仰には、大きなパラドックスが含まれ、わたしたちは、真理の達人になることはできません。

提言：その二

キリストと出会う道を探し求める

イエスは学説を教えたわけではありません。イエスは、わたしたちと同じように人生を歩まれました。わたしたちとのただ一つの違いは、イエスにおいて、神の愛がいかなる曇りもなく輝いていたことです。

イエスが生きておられたときも、多くの方は彼を信用しませんでした。「彼は気が狂っている」(マルコ 3:21)、「彼は自分を神と等しい者だと考えている」(ヨハネ5:18)。

だれもイエスを信じるように強制されていません。しかし、信じることは単なる感情以上のものです。それは一つの理性的な行為でもあります。イエスを信じる信仰を持つために、よく考え抜いた上で決断をすることが可能なのです。

何がイエスを信頼できるものとするのでしょうか。二千年にわたって、なぜ彼はこれほど多くの弟子を持つことになったのでしょうか。謙遜であられたからではないでしょうか。イエスは、だれに対しても何も押しつけられませんでした。彼はただ、神は近くにおられるのだと伝えるために、すべての人に向かって行かれたのです。

イエスは、社会が信頼することを拒んだ人たちを信頼なさいました。彼は、その人たちの尊厳を回復なさいました。イエスご自身は、嘲られ排除されても、それを甘受されました。それは、貧しい人や排除された人たちに対する神の愛が否定されないためです。

わたしたちは、福音書で彼の生涯の物語を読むことによって、キリストに出会うことができます。彼は、今日もおわたしたちに、「わたしはあなたにとって何者か」とお尋ねになっておられます(マタイ16:15)。また聖餐において、ご自分をわたしたちに与えていると告げられました。

教会が、人々を心から歓迎するであるとき、わたしたちは、キリストを信じる人たちの交わりの中でキリストに出会うことができます。

来年、わたしたちは、キリストを愛するすべての人たちの目に見えるが現実のものとなるように、実際的な歩みを探し求めてゆきます。

わたしたちは、極めて貧しい人たちの中でイエスに出会います。イエスは、彼らに特別な愛を持っておられました。

「わたしの兄弟姉妹であるこれらの最も小さい者の一人にあなたがしたのは、わたしにしたのである。」(マタイ25:40) 2015年の大会にむかって、イエスのこの言葉の真実性を裏づけてゆこうと思います。

イエスに信頼を置く証し人たちに注意して目を注ぐとき、イエスに出会うことができます。

キリストと出会ったことによって人生が変えられた人々に会い、一緒に話すために、一人で、あるいは何人がで、そういう人のところに出かけようではありませんか。

あるいは、信仰の証人の生涯と一緒に読もうではありませんか。アッシジのフランシス、ジョセフィン・バキータ、ディートリッヒ・ボンヘッフアー、マザー・テレサ、オスカー・ロメロ、アレキサンダー・メン、その他の多くの証人。

彼らは皆、互いにとっても異なった人々です。それぞれユニークな賜物を持っています。彼らの真似をしようとする必要はありませんが、キリストへの信頼がどのように彼らを変容させたかを知ることが大切です。

彼らには短所もあります。自分の内に夜の闇を経験した人もいます。しかし、彼らは皆、祈りによって神に語りました。キリストとの親密な交わりが彼らを自由にしたのです。こうして彼らの内にある最良のものが開花しました

提言：その三

神に寄り頼む道を探し求める

神を信じること、彼を信頼すること、それは神に寄り頼むということです。信仰をもつということは、すべてを説明することができるか、より容易な生活をおくるということではありません。それは、不変性と出発点を見出すということです。

それは、自分の成功や失敗に依存しないということ、つまり最終的には自分自身ではなく、わたしたちを愛してくださるお方に寄り頼むということ。

だれも何かに寄り頼むことなくして生きることはできません。そういう意味では、だれもが何かを信じています。イエスは、ご自分がそうであったように、またご自分がそのようになさったからこそ、神に寄り頼むようにとわたしたちを招いておられます。そして「天におられるわたしたちの父よ」と祈ることを教えてくださいました。

礼拝における沈黙は、黙想や洞察を深めます。しかし、もっと重要なことは、それを通して、わたしたちは、神の神秘の前に、神の神秘の中に置かれるということです。

「安息日」の心とその時間を大切にすることです。すべてを停止させ、何もしない時間です。そして、毎週数時間、近くの教会を開くことに時間を差し出し、他者と祈ったり、キリストの死と復活を記念するために毎週地域の教会に加わったり・・・、そのようにして、わたしたちの日常に、神のための場所を差し出してゆくのです。

すべての人間の中に、内なるいのちがあり、そこでは光と影、喜びと不安、信頼と疑いが混じり合っています。そしてそこで、驚くべき新しい始まりが起こるのです。

自分が愛されている、または愛していると知るとき、友情の深い絆を体験するとき、創造物や人間の創造性の美しさに感動するとき、人生は本当に美しいのだと心打たれます。このような瞬間が、突然訪れることがあります。苦悩の期間にさえも、そのただ中に、他のところから注がれる光のように、この瞬間が訪れることがあります。

このようなとき、単純素朴さのうちに、わたしたちは、自分の中に息づく聖霊の存在を知ります。

日々の生活の中で、多くの人が、人間関係の破綻や予期せぬ変化を体験するとき、キリストとの関係は、継続性と意味を差し出します。

信仰によって、わたしたちの内側の矛盾が消えるわけではありません。しかし、聖霊は、喜びと愛の人生を生きるようにとわたしたちを促すのです。

提言：その四

恐れずに未来と他者に自分を開く

信仰の確信は、自分を内側に閉じ込めません。キリストを信頼するとき、わたしたちは、未来を信頼し、他者を信頼することへと開かれてゆきます。それは、現代の課題に、あるいは自分自身の課題に、勇気をもって直面するよ

うにと励まします。

信仰とは、しっかりとわたしたちを固定する錨のようなものです。神の未来に、そして決して切り離されることのない復活のキリストにわたしたちを堅く結ばせます。福音は、死後の世界についての憶測は語りません。しかし福音は、イエスを---すでにわたしたちのいのちである方を---必ず見るといふ希望をわたしたちに宣言します。

信仰は導きます。将来のことを、他者のことを、もう恐れることはない。

信仰という信頼は、けっしてうぶなものではありません。それは、人類の中に存在する悪を、あるいは自分の心の中にさえ存在する悪をしっかり認識しています。しかし、信仰は忘れません、キリストがすべてのために来られたということ。

神への信頼は、わたしたちの内に、新しい見方を生じさせます。他者、世界、そして未来への新しい見方。それは、感謝と希望、美しさに気づく感性を内包する見方です。

神への信頼は、創造性へとわたしたちを解放します。

そして、わたしたちは、四世紀の聖グレゴリオスと一緒にこう歌うのです。

「あなたは、すべてを超絶しておられる御方。どんな才気があなたを捕らえ得るでしょう。生きとし生けるものはみな、あなたを喜び祝います。すべての憧れがあなたを渴望しています。」

テゼ2015年8月

新たな連帯のための大会

テゼ共同体の創立75周年

ブラザー・ロジェの生誕100周年